論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	「モンゴル帝国以後の遊牧王権： モンゴル・オイラトの対立抗争とチベット仏教の受容」
氏　　名	宮 脇 淳 子

17世紀はモンゴル史の転換点である。それまでモンゴル帝国の後裔の遊牧騎馬民だけの世界だった中央ユーラシア草原に、東からは満洲人の建てた清朝、西からは帝政ロシアが領土を拡大してくる。異民族の支配下に入ることを余儀なくされ、父祖伝来の生活を失うことになったモンゴル人は、この時はじめて、チンギス・ハーンから自分につながる系譜や、祖先の武勇を語った伝承を書きとめる必要に迫られた。また、16世紀末のアルタン・ハーンのチベット仏教受容以後、全モンゴルにチベット仏教が広まり、17世紀に一斉に誕生したモンゴル人自身の手になる、モンゴル年代記と呼ばれる歴史書は、その影響を強く受けることになった。

13世紀のモンゴル帝国時代の文書史料は、モンゴルに支配された人々によって記録されたものである。農耕地帯の植民地を失ったあと草原にもどったモンゴル系遊牧民は、系譜以外に文書史料は持たず、祖先の偉業も口頭で伝承してきた。そういうわけで、東のモンゴル人の間では17世紀、西のオイラト人の間では18世紀に誕生した年代記は、遊牧民が自らの意志で書きとめた、きわめて貴重な言語史料であるといえる。オイラトに年代記が誕生したのがモンゴルよりも新しいのは、オイラト社会が異民族の圧迫を受け、その支配下で変貌を遂げる時期が、東のモンゴルにくらべて1世紀遅れたからに他ならない。

17世紀がモンゴル史研究にとって希有な時代であるさらなる理由として、草原の遊牧民を支配するようになった清朝とロシアでも、遊牧民の社会に関する詳細な記録が誕生したことが挙げられる。清朝を建てた満洲人は、モンゴル帝国の家来の出身で、遠くのシリアで生まれたアラム文字に由来するモンゴル文字を借用して満洲文字を作った。17世紀以来モンゴル人を支配するようになった清朝の公用語は、20世紀初めまで、満洲語・漢語・モンゴル語の三言語だった。また、西方のロシアでは、シベリアに進出したコサックや軍人

官吏が、現地で接触した遊牧民についてのさまざまな報告をモスクワに送った。それらの古文書が、公式文献として保管されている。

日本におけるモンゴル史研究は、主として東洋史学者によるものであったが、その中で、「ダヤン・ハーン論争」と「ジューンガル・ハーン国論争」が起こった。前者の論争の焦点は、モンゴル年代記の記述の信憑性をめぐるものであった。モンゴル年代記の伝える紀年は、干支のみで記され、口頭で伝承されてきたために、確かに漢籍に比べて誤りも多いが、15-17世紀のモンゴル史を再構築するのに、漢籍はほとんど役に立たない。モンゴル人自身が自らの歴史をどのように解釈したのかを知るために、また、草原の遊牧民の精神世界を理解するためには、モンゴルとオイラトの年代記ほどすぐれた史料はない。筆者の恩師である岡田英弘が先鞭をつけて、それらの内容を広く紹介したことによって、日本の東洋史学界に新しい研究分野が加わることになった。

モンゴル年代記は、元朝がモンゴル高原に退却したあとの北元時代を「四十モンゴル」と「四オイラト」の対立抗争の歴史として物語る。オイラトは、モンゴル帝国建国時の13世紀初めには、モンゴル高原西北部、今のロシア連邦トゥワ共和国を本拠地とする大遊牧部族であった。13世紀後半、モンゴル帝国は継承争いによって分裂し、さらに宗主国の元朝が1368年に中国を失って草原に撤退したあと、オイラトは反フビライ家の四大部族連合を結成してモンゴル高原の覇権を握った。

のちのジューンガル帝国の君主の祖先と言われる、トゴンとエセン父子が率いるオイラト帝国は、エセンが部下の反乱で殺されて15世紀中葉に瓦解したが、オイラト部族連合は、その後も、故郷であるモンゴル高原西北部と中央アジアで一大勢力を誇った。一方、16世紀になると、モンゴル高原におけるチンギス・ハーンの唯一の男系子孫と言われるダヤン・ハーンが即位し、新たなモンゴル部族連合が誕生する。これが「四十モンゴル」である。

さて、筆者自身が関与した、後者の「ジューンガル・ハーン国論争」は、17世紀後半に中央アジア草原を席巻し、18世紀半ばに清朝に滅ぼされた「最後の遊牧帝国ジューンガル」が、どのような王権であったかについての論争である。これについて最初に研究をしたのは、ロシア帝国のために働いたドイツ人学者パラスで、日本では、ソ連の学者ズラートキン著『ジュンガル・ハン国史』に拠った若松寛氏の研究が、17世紀オイラト史の定説となっていた。ところが、18世紀初頭に書かれた『オイラトの高僧ザヤ・パンディタの伝記』を読んでいるうち、それまで権威とされてきた『ジュンガル・ハン国史』が、自国に都合のいい部分だけを引用し、内容を歪曲していることが明らかになった。その他の欧米の学者も、漢文や満洲語を読まなかったので、故意にではなかったけれども、草原に広がったモンゴル系遊牧民の帝国を、西方と接触した部分だけを見て、ロシア帝国との関係だけで

解釈しようとしたことが明らかになった。

筆者は、ロシア語史料の見直しはもちろん、モンゴル語、満洲語、チベット語史料を併せて調査し、「ジュンガル・ハン国」という国家は存在しなかったという結論に至った。「最後の遊牧帝国ジューンガル」は、ジューンガル部族長を盟主とする部族連合のことで、帝国の君主であるジューンガル部族長の称号は、モンゴル語から借用した副王の意味のホンタイジ号でしかなかった。しかも、その称号ですら、チベットのダライ・ラマ政権から与えられたものだったのである。

オイラト諸部は、最盛期には、東は今のモンゴル国から西はヴォルガ河畔まで、北はバイカル湖畔から南はチベットまで広がった。このように遠く離れて暮らす遊牧部族長同士は、緊密な婚姻関係を結ぶことで同盟関係を維持したが、かれらは同時につねにライバルだった。ジューンガル部族長の中でただ一人、ガルダンだけが、ダライ・ラマ五世からハーン号を授与されたのであるが、このハーン号は、オイラト部族連合の盟主という意味であり、またホシュート部のグーシ・ハーン以来、チベット仏教の護法者という意味も持っていた。以上が、最後の遊牧帝国ジューンガルの王権について、筆者の導いた結論である。

さて、筆者の卒論、修論の研究テーマは、1688年ジューンガルのガルダンに攻められたハルハ・モンゴルが清朝に服属する際、仏教の高僧ジェブツンダンバ・フトクトが「ロシアは仏教を奉じていず、風俗も異なる、しかし、清朝は仏教を崇敬しているから我々はこれに依るべきである」と主張し、清朝の保護を請うた、という物語に対する疑問であった。

この問題については、ハルハが三ハーン部に分かれ、ジェブツンダンバ・フトクトがこれを率いたと言われているのは、実は1691年のハルハの清朝服属後のことであって、服属前にはフトクトはまだ全ハルハの指導者ではなく、モンゴル人自身は伝統的な左右翼への帰属意識が強かったこと、ジェブツンダンバははじめゲルク派には属さず、だからこそ、ゲルク派であったジューンガルのガルダンに敵視されたのであるということを論証した。

13世紀のモンゴル帝国の後裔である中央ユーラシアの遊牧民が、トルコ系とモンゴル系に分類された分岐点は何だったかを考えるとき、宗教と民族の分布がここではほとんど完全に重なる。現在モンゴル系民族に分類される人々は、16世紀以降チベット仏教徒になった人々である。ただ一つの例外は、モンゴル国の西北に位置するロシア連邦トゥワ共和国の人々で、その言語はトルコ系の一方言ということになっているが、この地はオイラト部族連合の故郷の一つで、清朝時代にはモンゴルの一部として統治されていたために、モンゴルの影響下でチベット仏教徒になったのである。

オイラトは、トルコ系遊牧民から「留まった人」という意味で「カルマク」と呼ばれ、ロシア語でカルムィクとなった。オイラト部族連合の一構成員トルグート部は、1630年代

にヴォルガ河畔に移住したあとも、熱心な仏教徒で、周囲のイスラム教徒やロシア正教徒のコサックたちとは一線を画した。トルグート部の大部分は、ジューンガル帝国が清朝に滅ぼされたあと、1771年に故郷のイリに帰ったが、このときヴォルガ河西岸に残された人々が現在のロシア連邦カルムィク共和国の国民で、かれらはもっとも西方に住むチベット仏教徒のモンゴル系民族である。トルグート史研究は、西方からモンゴル系遊牧民に光をあてるという意味において、オイラト部族連合であったジューンガル帝国の実体解明と、モンゴル民族のチベット仏教受容の背景を考察する際に大いに役立つのである。